

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ (三一)

第九一則

南泉牡丹

〔示衆〕

衆に示して云く、仰山は夢中を以て実と為し、南泉は覺処を指して虚と為す。若し、覺も夢も元より無なることを知らば、始めて虚と実とは待を絶することを信ぜん。且らく道え、斯の人、甚麼の眼を具するや。

〔本則〕

挙す。南泉、因みに陸亘大夫云く、肇法師はまた甚だ奇特なり「また是れ遼東の白豕」。道うことを解す、天地同根、万物一体と「両指を竖起す」。泉、庭前の牡丹を指して云く、大夫、時の人は此の花を見ること、夢の如くに相に似たり「壁を隔てて状を過す」。

今回は大勢の人物が登場しています。釈尊を別にしても仰山・南泉・陸亘大夫・肇肇の四者がいて、テーマは夢と現実。面白そうですね。

まず、古い順に人物を紹介。肇肇（三八四～四一四）は後秦時代の天才的な学僧です。長安で生まれ老莊の学を修め、クマラジユウの弟子となり、学解にすぐれた人。禅思想の形成に大きな影響を与えたといわれます。つぎに本則の主人公であります南泉普願（七四八～八三四）は、馬祖の法嗣で湖北省南泉山の道場で禅を鼓舞し、百丈・西堂とともに馬祖門下の三大士といわれた禅匠。その門下には、趙州・長沙・子湖などの逸才が出ています。

陸亘大夫も在俗者ながら南泉の弟子。官職は太常少卿や御史大夫など、錚々たる肩書きのある人物。仰山慧寂（八〇七～八八二）は禅法を百丈・潯山・仰山と承け、この門流が潯仰宗という禅の一派を形成した派祖として有名な人。南泉も仰山も、例により山の名で呼ばれた唐代の禅匠たち。ただ、現在の南泉山には伽藍の跡もなく、普願の墓塔跡という堆土が遺されているだけです。また、この『従容録』で南泉さんがテーマとなっている則は、第九則「南泉斬猫」、第六九則「南泉白牯」、そしてこの第九一則「南泉牡丹」の三つです。つまり、南泉は今回が初登場です。



では、万松さんの「示衆」を例により意識してみよう。

仰山和尚は夢の中で釈尊と同じ真実の説法をした。南泉和尚は覚りすら真実ではないといった。もし、覚りや夢がもともと無だとわかれば、虚と実とは別じやないと思はれるだろう。

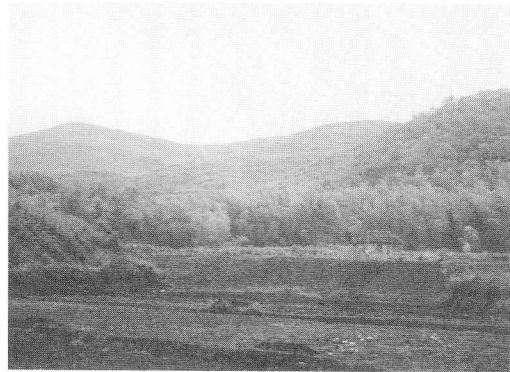
そう信じられる人は、いったいどんな眼をもっているだろうな。およそこんなところだ。

の夢中説法というのは、じつはこの則の直前にある第九〇則「仰山謹白」でくわしくとりあげられています。その説法の内容は、真の仏法は学解や理論ではなく、言葉や分別をこえた日常の生きざまにある、というすばらしいものだ。だからこそ、それは釈尊と同じだといえる。

また、南泉が覚りも夢だといったというのは、このつぎの「本則」でのべられるところ。このように、夢が真実で覚りは夢というからには、覚りも夢ももともと無であり空なのであって、虚も実も一つ。この道理を教えた南泉さんを参究してみよう、ということです。

そこで「本則」をみましょう。陸巨大夫が師匠の南泉に言った。「僧肇法師はともすばらしいですね。天地万物はすべて本

南泉山承恩寺の伽藍址



体が同一だといっています、まさにそのとおりですね。」すると南泉は庭前に咲いているボタンの花を指していった。「大夫よ、今どきの者はこの一株の花を見ても、まるで夢の中で見ているようなんだね。」

このような意味。ふだんから陸巨大夫は僧肇の作とされる『宝蔵論』にある「天地同根、万物一体」という有名な一句を大切にしていたのでしよう。禅門ではこの語句を「天地万物はそのままだ仏性のあらわれであって、それはまた己れの本心と異なるものではない」という意味にとっています。ですか

ら、大夫もそういう意味でよいかと南泉にたずねた。

すると南泉さん、ボタンの花を指して、夢の中で見ているはダメだよと、やんわりたしなめた。つまり、大夫が天地万物と自己心との同一性に安心している観念的な覚りをとがめたのです。ボタンの花の美しさは、ボタンのいのちの躍動。仏法の世界もまたいのちの躍動する実践。だから、夢の中でどんなに美しいボタンを見ても、見るだけではダメ、というわけ。

だいたい、南泉は徹底して分別や理論を嫌った人です。覚った人とはみずから濁世の中に入って衆生済度する人だと示し、仏法の堂奥はいまここに生かされ生きている事実の自覚にあると教えています。こういった南泉さんの仏法を万松さんは高く評価し、大夫が僧肇をはめたのにコメントしては「遼東の白豕」、つまり遼東で生まれた白い豚など珍しくもないとけなし、南泉の夢の中という教えを「壁を隔てて状を過す」、つまり壁越しに判決を読むような婉曲の妙だとほめたたえています。

ひるがえって、私たちはいつも虚と実のように、物事を相対した概念で分別をこらしています。仏法の世界では、それは空や無。と

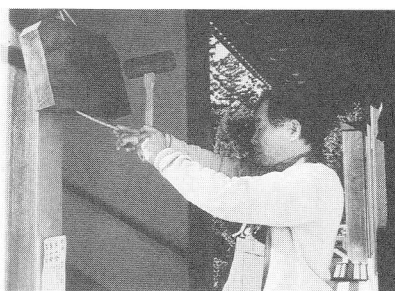
ころが道元禪師は『眼蔵』の夢中説夢の巻で、夢も覚めるもともに真実のすがたであるから、夢の中にも発心・修行・菩提・涅槃があると説かれます。たしかに、明恵上人の『夢の記』などは驚くべき信仰の体験記ですから、高僧方の境界は並はずれなものです。

私たちは、せいぜいふしぎな夢か怖い夢しか記憶に残りません。たとえば、私は以前、近くの檀家K家の奥さんが真夏の明け方、庭に咲きはこる百日紅の樹下に歩いて来たのを見て、「おや、入院していたのでは？」と聞くと、「いいえ、今朝はとても気分がよいのです」と答えた夢をみました。まもなくK家から奥さんの死が報ぜられ、それが夢の時刻と一致するのを知り、愕然とした事があります。

また、私の母が他界した時、幼少からの親友であったヨリさんは三晩続けて母の夢をみた。後に私はヨリさんから聞きました。こんなふしぎな夢の話は、だれでも経験があることでしょう。ただそれをふしぎな話しておわらせず、禪師の教えのような修行にはできないまでも、人生の教訓としたいもの。その為には良い夢をみましょう。良い夢をみるには良い生き方が前提であります。

第一九回

成道会、円成す



木版を打つ五十嵐さん

一二月九日、龍泉院本堂において第一九回成道会が、道友二七名の参加を得て行われました。成道会は、お釈迦様が六年の苦行の果てに菩提樹の下で瞑想に入り、明けの明星を目にして悟りをひらかれた事を讃えての行事です。

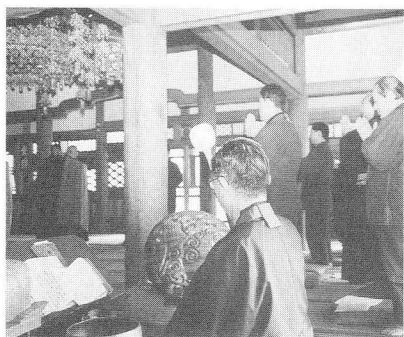
二柱の報恩坐禅の後、龍泉院梅花講による奉詠があり、会員配役による成道会が催されました。拈香法語、普同三拝、般若心経が唱和され、その後で、老師と会員の間で問答が交わされました。

今回の椎名老師の法話は、亡くなられて今年で一七〇年の良寛さんのお話でした。以下概略。

お坊さんの偉さを見る三つ

のポイントがある。それは、なぜ出家したかという動機、どこでどのような修行をしたかということ、晩年どのように生き、どんな死に方をしたかということです。

良寛さんは愚直、清らかなその性格ゆえに家業を通して人間の醜さを見、絶望し僧になることを決意します。岡山から北国巡行に來られた国仙和尚について行き、玉島の円通寺で修行、三七歳で印可証明を受けます。翌年、悟後の修行で全国を行脚し、やがて越後に帰ります。最期は島崎村の木村家で亡くなりますが、五合庵時代からの晩年は充実した生き方をしていたことが、書や詩からうかがえます。



徳山さんの刻むリズムで進行

当時の良寛さんの様子は、同時代の飯塚利久さんが『橘物語』と

して書いており、その中に良寛さんがいたおかげで村中の空気が善くなり、人情が厚くなったと記述されています。村の空気が変わったのは、良寛さんが仏様のような人柄で人々に接し、絶大な影響を与えたからです。没後一七〇年に因み、良寛さんの素晴らしさをご紹介いたしました。

法話の後の点心では、松井さんが典座をされ、大坂さんにお手伝いいただき、混ぜご飯と温かい手打ちそばを頂戴しました。

今回の成道会も大勢の会員の添菜、ご支援によって、無事円成することができました。椎名老師がおっしゃったように、目に見えない力が冥冥として伝わって衆力和尚の威神力で成道会が円成したといえます。今回出席されなかった方々からもたくさんの方の添菜をいただきました。大変有難うございました。



典座の松井、大坂さん

追悼抄

森岡翁、変らぬ雷喝を！

山主 椎名 宏雄

昨年は当参禅会の発足三〇年という節目の年でしたが、暮にははからず森岡敏雄翁のご逝去という悲報に接し、文字通り当禅会の年輪と会員各位のご精進の星霜を痛感させられる年となりました。

昨年行われた幾つかの記念行事中、菊の十一月三日に会員有志等三〇名による第二回在家得度式は、その掉尾をかざる上求菩提の浄業でした。この厳肅な儀式で不肖わたくしが戒師として剃髪儀礼に用いた戒刀は、正真正銘の短刀でした。これは数年以前、南海太郎正尊こと森岡翁が登録証まで添えて当山に奉納された弄精魂の作品でありました。わたくしにとつて最初の戒刀依用が、三〇周年記念での会員得度式という奇しき好因縁であり、これには翁もきつと喜悅されたことでありましょう。

翁は私たちの禅会にあって、常に異彩を放っておられました。忘れもしない昭和四九年のお盆過ぎ、かん高い声で「ご住職！お尋ねし

森岡さんを偲んで

ますが、生れつき劣った人間はいくら鍛えてもモノにはならんのでしょね」という単刀直入の電話に驚かされました。私の「そんなことはありませんよ」の応えに、「私はつまらんカジ屋ですが、材料の良否で作品は決まってしまうんです」でも人間は違いますよ。そんなやりとりのあつた第四日曜の朝、電話の主が当山に。それが五〇代半ばの森岡さんでした。

以来、四大ご不調となられる直前の平成一二年八月まで、ちょうど満二六年の長期にわたり、禅会古参の重鎮として、会の発展と会員各位への啓発に大きな存在であつたことはご承知の通りです。

翁は客観的に高い評価を受けている名工であつたにもかかわらず、常にへり下る謙虚さと、愚直なまでの純朴さを具えた方でした。禅会を欠席する時は必ず手紙でその旨を報じる律義さ、納得ゆくまで何度でも同じ質問を発する朴訥さ。私の言葉には絶対の信をおかれたので、私は心して話すようになりました。つまり私はいつしか翁に鍛えられ修行させられていたので

あり、感謝するばかりであります。常に真剣勝負のシヤバ世界から冥界に安住せられた森岡翁、私たちが怠惰な時は変わらぬ大喝一声の雷喝を発せられんことを。

合掌

森岡語録

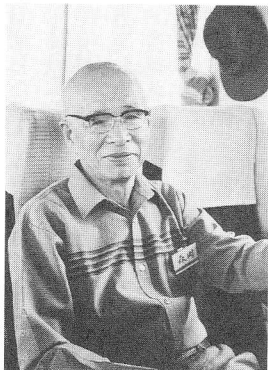
松戸市 小畑 節朗

昭和五〇年代の初め、その頃の龍泉院参禅会は今と違って参禅者も少なく、坐禅、提唱も茅草きの旧本堂で行われ、冬などは相当に寒いものでした。

森岡さんとは行き帰りのバスが一緒で、以来二五年余、月一回の出逢いを重ねました。

とにかく声が大きい。我家にも何回かお出でになつたこともあり、電話で話す内容が全て家人に聞き取れる程でした。

話は必ず刀の鍛えと坐禅の話で



常真寺へのバス車中（平成二年）

す。それは両方共に根源に関わる

話ばかりで、私もそれなりに作刀について概念を教えて頂き、また実際を見せても頂きました。

次の言葉は「森岡語録」の精髓で、もう耳に胆胝の出る程聞かされ、また毛穴に染み込む程聞きました。

刀とは（刀の機能美とは）

「刀は折れず、曲がらず、良く切れて、使い易いものでなければならぬ。このようなものは形が良いのだ。」

材料の復元

「鎌倉・南北朝時代の刀を目指すならその時代の材料を造らねばならぬ。材料を造り得ずして名刀なし。今やつとその入口に立った。」

作刀と坐禅との関係

「一人前になることである。（両方共）作刀で一人前と言うのは、現代の刀匠の水準になるのではない。

正宗・長船に迫るものが出来て一人前。坐禅は釈迦・道元の坐禅が出来て一人前。だから私は半人前。」

本物とは

「本物と似て非なるものとは、同時にそれを手に取って対比すれば一目瞭然。本物は刀の素人でもわかる。坐禅では？」

老師には叱られそうだが、寒中、坐禅の帰りは落第生宜しく、柏の

「竹やぶ」で、一杯の酒と一椀の蕎麦で「折れず、曲がらず…」を談義したものでした。もう全て夢となりました。

刀匠南海太郎正尊は、もう此の世には居ない。

一月四日、訃報を奥様よりお聞きして、涙ぐみながら独り正月の酒を味わった次第です。

森岡大先輩に合掌

千葉市 寺田 哲朗

一月の会でそのことを伺い、先輩を偲んで一七年前に『明珠』創刊号から五回にわたって書かれた「作刀と坐禅」を読み返してみました。こんなとき合本はありがたいです。

「拙工は馬鹿であります。お釈迦さまが六年、達磨大師が九年と申しますが、私は五〇年近く作刀を重ねて全くだめ。」日経ビジネス誌の表紙に作刀中の写真で登場した工匠の口ぐせでした。

「禅については『守』一点でいくつもり。」老師への絶大な信頼です。

「成っていないくても修った禅がどう仕事を変えていったかを現物（拙工作の日本刀）により見ていただくつもりです。」これが一五年

経って一月の得度式で老師がお使いになったと言われた刀だったのですね。

森岡先輩はひたすらご自分に厳しく、私共には飄然とした親父さんでした。ご自分を馬鹿というのは冗談ではなく本気だったようですが、何か気迫があつて誰も返す言葉が出ませんでした。私はいつも笑顔で挨拶しつつも、「貴君は工場に勤めていたそうですが、ものづくりの原点を体得していますか？」と見透かされているように、親切にも怖い大先輩でした。

合掌

『南海太郎正尊』

松戸市 徳山 浩

私の机の上に二本の文鎮があります。二本とも森岡さんから頂いた大切なものですが、その内の一本は私の名前を刻していただいた言わば特注品というべきものであり、あとの一本は第二回成道会の際、出席者三〇名全員がそれぞれ頂いた貴重なものです。

それには、「六年苦行 一坐成覚 昭和甲子 成道会」と刻されております。生涯現役を貫かれた現代の刀工「南海太郎正尊」森岡さんの真心を込めた、気迫そのもの

のの鑿のあとが鋭く立派で、見るたびに私の気持を奮いたたせ、勇気づけてくれます。

森岡さんは「作刀と坐禅」という題で、『明珠』の創刊号から五号まで、長編の素晴らしいエッセイを残されました。私は森岡さんから長年にわたり、作刀のことをはじめ、色々なことを教わってきました。

二月中旬、更に森岡さんの刀工としての足跡を求めて、代々木にある刀剣博物館を訪ねました。森岡さんの先祖で安政の頃、山城の国で活躍した刀工「南海太郎朝尊」のこと、全日本刀匠会に登録されている刀工は約二百名で、各展覧会等で数々受賞の実績があったこと、そして何よりもトップクラスで活躍された数々の功績に改めて感動してしまいました。

帰りに「作刀の伝統技法」その他数点の資料を求め、今も森岡さんを偲びながら興味深く拝見しております。

森岡さんのご冥福を心よりお祈りいたします。

合掌

刀工森岡先輩を偲んで

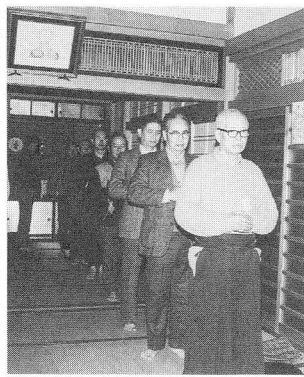
柏市 高野千代子

布瀬行きのバスが、新田原停留

場に止まり、乗りこんだ私に後ろを振り返って笑顔を下さる森岡さんが、いつもそこにおられました。参禅の一日が始まる朝のことです。車中では、たわいのないおしゃべりが続き、泉入口で下車し、裏山を歩いてお寺まで一緒に帰らせていただく、月一回の出会いの日でした。いつも背すじを伸ばし、シヤキツとした歩き方が印象に残っております。奥様からのお便りによりますと、一年二ヶ月余の闘病生活とか、歳月の早さと思うこの頃でございます。

故人を偲ぶ想いを記させていただくに当り、改めて、『明珠』創刊号から五回にわたり記された「作刀と坐禅」を読み返す機会をいただきました。

むずかしいことは、何も判らない私でございますが、その中で記されている、森岡さんの目指す作



経行する森岡さん（平成七年）

刀の心に触れさせていただいた一節がございました。曰く、

日本刀の本質とは、一、折れず、二、曲がらず、三、良く切れて、四、使い易い。こういうものは姿が良いのです。この四点を、一つだけ取り立てて強調するのではなく、全部の調和がとれてなければなりません。古来の名刀はこれを具備しております。

さて、何事によらず基本型と申すものがあります。型は師匠が教えてくれたものをそのまま受けるのが一番良い事です。いわゆる「守」であります。師匠が名人であればある程、「守」によって得られるものは大であります。

森岡さんの参禅の極意のきわめつけをのぞかせていただきました。その心を、こんなにも改めて知らせていただいたことに感謝いたします。

茶話会の席では、大きなお声で、発言される一声は、時に爆笑を誘い、あっけらかんと楽しい雰囲気を作り出しておりました。

高齢を感じさせない気迫は、刀工としての人生の中に作られていかれたものと思います。

作刀と禅の接点を求め続け、椎名老師のお徳を慕い、通い続けられた参禅会の星がまた一つ落ち、

寂しさで一杯でございます。

今はただ、ありし日のお姿を偲び、参禅会の皆様と共に、心よりご冥福をお祈りさせていただきます。

合掌

切に生きた人

柏市 武田 博志

昭和六〇年五月の参禅会で、初めて森岡さんに会った。茶話会で「船橋競馬場の裏から来てます森岡です。拙工は馬鹿であります。」と始まる大声に、私は身についている埃やカスが吹き飛んだ。あの日から、森岡さんの姿勢は変わることがなかった。

ご自宅から電車とバスを乗り継ぎ、八時半には龍泉院で袴姿の身支度を終えていた。凍える真冬、うだるような真夏でも一年を通して通ってこられた。一時間半もかけて年配の森岡さんが通ってこられる、その姿だけでも私の励みになった。

ある時、お寺の駐車場で森岡さんと話していた。中国大陸で人を殺した話をした。そして、今もやぐざ者が四、五人かかってきてもビクともしない、といった。足を開いてすっと立った姿は武士だった。軍刀を持った森岡さんがそこ

にいた。これが殺気というものか、こうして身じろぎ出来ないまま、私もこの老人に殺されてしまうのか。それほど森岡さんの口から出る言葉は真つ直ぐで、いつも気迫に満ちていた。嘘がなかった。

大切の切が、一所懸命と同義だと知った。大切とは、その時々を命をかけて生きること。大切と聞くと、私は真つ先に森岡さん进行浮かべる。

私が表具という手仕事をしていくこともあつてか、よく言われたことばがある。

「いいものを作っていくなくてはいけない。作る物は違うけど、同じ職人だから分かるでしょ。」

納得いく物がつくれないと森岡さんはいつも言っていた。目標は現代の名刀ではなく、なんと鎌倉時代の名刀をめざしていた。

物は無心になつて作れ。作り手の臭みを消し去ったところに、はじめて凛とした姿を現す。物を作る者にとつて、いつも心に留めていなくてはいけないこと。それはどこか仏道修行の基本的態度と通じていた。

いま、私の手元に鋼の文鎮が残された。圧倒的な存在感のそれは、まさしく森岡さんだった。

家族の絆

船橋市 森岡 糸子

結婚五十七年余り連れ添った主人が、あと二日で新年を迎える昨年二月二十九日に他界しました。一昨年一〇月一六日に入院し、昨年八月三十一日まで病院での闘病生活が続きました。

入院中は、嫁と毎日交代で様子を見に行きました。要介護度五の認定を受けた上で、九月一日より在宅介護に切り替えました。在宅介護は、家族の負担の大きいことを周囲から色々と助言を受けておりましたが、幸い、長男夫婦は、声をかければ届く距離の同じ敷地内に自立した生活をしておりました。

在宅になつてからは、朝から午後三時までは私が受け持ちました。夕食と寝るまでの世話、そして夜十時の点検は嫁が受け持ちました。これは私の健康を嫁が心配してくれたからです。また、私の手におえないときは声をかけて手伝ってもらいました。

在宅介護に切り替えて一ヶ月が過ぎ、二ヶ月と経つとそろそろ疲れが出てきて、本音と建前の心の揺れを感じざるを得なくなりまして。この様子を見た大黒柱(息子)

が、上手く橋渡しの役をして、辛
いときも笑いながら世話をできる
ようにしてくれました。

大晦日に、一年の締めくくりと
して息子夫婦とともに外食に出か
け、年越しそばを食し、その後は
NHKの紅白を見て、看護の疲れ
を癒すようにと言ってくれました。
堀内孝雄さんの河島英吾を偲んだ
歌を聞き、自然に涙が出てしまし
た。傍らでは年末年始のため茶毘
にふせず、主人はドライアイスを
抱きながら自宅で新年を迎えまし
た。ゆつくりと五日間を家で過ご
せて、主人も満足したことを思い
ます。

この一年を振り返り、あらため
て家族の絆の大切さを心の奥に感
じ取りました。また人間どなたも
心の中にある本音と建前という気
持ち、それを噛みしめながら、新
しい年を一層充実した日々にして
過ごそうと思います。

尚、本人の遺志により、近親者
だけで長い労を勞い、葬儀、野辺
の送りを年明けに無事営むことが
できました。また葬儀の翌日には、
参禅会三〇年の記念号をいただき、
皆様の手記を拝読させていただき、
ご縁の深さが身に染み感謝いたし
ました。

末筆ながら長い間、椎名御老師、

小畑様、徳山様、高野様、参禅会
の皆様にご指導いただき、あらた
めて家族共々厚くお礼申し上げます。

平成一四年一月

夕暮れの帰り路

—在家得度を戴いて—

我孫子市 三浦 輝行

まだ大戦の傷跡が所々に残って
いた昭和二〇年代初めの東京。

山の手に較べて復興の遅れてい
た下町にはトタン屋根のバラック
が軒を連ね、ゴミゴミした迷路の
様な裏路地を、私達ガキ共は罵声
を挙げて走り廻り、寺社の境内に
は秘密の隠れ家を作り、メンコ・
ビー玉・ペーゴマは三種の神器。
偶に原っぱの中から見つかる厚
いガラスの塊。

「高射砲で撃墜されたB29の窓ガ
ラスの破片だ」と広場の片隅、材
木置場に住む不思議なオヤジに教
わり、新聞紙に包み、境内の主、
大銀杏の虚に隠したもの。

お尻にぶ厚い継ぎあての付いた
半ズボンにランニングシャツ、擦
り減ったズックが僕達の着成りで、
それもほとんどが兄のお古だった。
風呂敷を首に巻いたスーパーマン

は本当に空を飛べると錯覚し、た
まに怪我をする奴が居た。

どの町にも悪ガキの団がいて
六年生の大將を先頭に、少年
探偵団を喰いながら縦列行進。隣
町との境界線では小競り合いが続
き、世界中で今だに絶えない局地
戦と同じこと。

そうして僕達は朝から晩まで、
本当に良く遊び廻っていた。とも
かく町の隅々に至るまで我が者顔
で走り抜け、偶に恐い親爺に捕ま
り、「兵隊さんがジープで来るぞ
っ!!」と一喝され、蜘蛛の子を散
らすように逃げ去ったもの。

やがて夕闇迫る黄昏どき。
あちこちの家から聞こえる呼声
で広場からは一人減り、二人減っ
てゆく。

「もうちょっと、もう一回」と遊
び続けたり、隣町へ偵察に行った
時などは、大將が居ないと薄暮の
中、帰り道が判らず心細くなった
ものだ。

「もう悪さはしません、寝る前に
便所へ行きます、ご飯の後は片附
けます、だから道を教えて:」
そう呟き、泣きながら歩いていた。
いよいよ辺りの闇が深くなる頃、
「あついたいた。こらっ泣くな」
そう、力強い大將の声が届く。半
ば迷子になっていた僕にとって神

様、仏様の様に思えた。

あれから五〇年。

国は豊かに潤い、私達の生活面
も別世界の様になりました。し
かし一方、仕事に忙しく追われ続
けていた僕は、危うく路を見失う
処だった様です。

参禅して僅か二年。

何かに迷い続け、答も見つから
ず只々、月日が流れていました。
時を忘れて遊びに夢中になっ
た、あの頃の様に—

在家得度の日、絡子・血脈を戴
き、法を聴き、ご老師の導きで僕
は迷うことなく仏弟子の片隅に座
ることになりました。

夕暮の帰り路—人生に泣いてい
た親爺の「僕」は、これで迷子に
ならずに済みそうです。

有難く、只々ありがたく—

雨の日の新年会

鎌ヶ谷市 相澤 善彦

新春を迎えた今日のごころ。最
初の催しは新年会への参加でした。

二月の冷たい雨の中、会場へ向
かう私は傘の柄を短く持ち、行き
かう人と車から自分を遮蔽し、こ
の一年を振り返って歩いていまし
た。

昨年(去年)の三月に初めて参禅会に参

加し、まもなく一年が過ぎようとしている。この間に大変な経験をしたものだと感じていた。足を組み、禪の学習をしているだけでも

以前に比べれば大きな変化、進歩と見えるのだが。在家得度、成道会への参加を経て、自分自身に何か変化が起きていると感じている。具体的には何がどうという訳ではないが、何かが確実に変わった。

そう思い考えているうちに会場へ到着、席へついた。参禅会でお会いしている皆さんであるが、顔と名前が一致しない方もおり、今

日はそのところをお酒の力も借りて親しくさせていただき、お名前ぐらい覚えて帰ろうと考えていた。

座が盛り上がり方をみせて、お一人ずつの挨拶があり、あの方のお名前は、お話しの内容は、と覚えていった。いったつもりであったが、注いだり注がれたりの間にだんだん怪しくなり、お開きの手締めの中にはもう……となつて、誰が誰やら。まことに楽しい新年会であります。

帰り道、外はまだ明るかったが、

龍泉院参禅会簡介

一、日時

毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、坐禅

第一炷 口宣、坐禅三〇分
経行 一〇分
第二炷 坐禅三〇分

一、講義

木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正法眼蔵』の提唱を聞く。昨年より「行持」上巻

一、座談

自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、参加資格

年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、会費

無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月八日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする

一、一泊参禅会

六月上旬、七炷の坐禅をし、ご提唱を聞く

相変わらず冷たい雨が降っており、また傘の柄を短く持ち、他人から顔が見られぬ様に、参加者を思い浮かべ、指をお名前を口にして歩きましたが、はて何度やっても十番目が出てきませんでした。

- 一月二七日 二六名（伊藤 幸一氏）
- 二月二四日 二五名（中村 正市氏）
- 三月二四日 二九名（永野 昭治氏）

沼南雑記

参禅会記録（内は座談の司会者

平成一三年

● 一〇月二八日 三四名（美川 恒子氏）

● 十一月三日 三〇名（第二回在家得度式）

戒 師 椎名 宏雄老師

説 戒 石川 光孝老師

● 十一月二五日 二八名（二階堂雄一氏）

● 一二月九日 二七名（第一九回成道会）

導 師 椎名 宏雄老師

総幹事 小畑 節朗氏

● 一二月二三日 二九名（相澤 善彦氏）

● 禅講の後、龍泉院スス払い

平成一四年

● 昨年暮れ、参禅会の長老である森岡大先輩がご逝去。一般会員がその訃報を聞いたのは一月の例会でした。穏やかな笑顔と真摯な姿は多くの道友に愛され、大きな励みとなった。謹んでご冥福をお祈りいたします。

● 去年は記念行事が続いた。大役を果たされた五十嵐、安本両年番幹事さん、ご苦勞様でした。今年の年番幹事は、添田昌弘氏と松井隆氏が担当します。宜しく願い致します。

● 年番幹事と『明珠』編集子に、御老師揮毫の立派な色紙を賜る。感謝感激！合掌！

● 沼南の春のどか。沼南・道の駅で菜の花畑を眺めながら、三人で『明珠』の引き継ぎ作業をする。

● 今泉さん、よろしく！（吾亦紅）
● 木蓮と桜が同時に咲いた今年の春。少し変だな……この地球。そんな中、『明珠』にも異変が。今号から編集の新担当となりました。気力、体力でフル稼働。皆様どうぞよろしく。（今泉房子）